

2020年1月NHK四国地方放送番組審議会

1月のNHK四国地方放送番組審議会は、20日(月)、東京第一ホテル松山において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった、「“神の衣”をつくる」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、2月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	高橋 祐二	(三浦工業 取締役会長)
副委員長	半井 真司	(四国旅客鉄道 代表取締役社長)
委員	神田 優	(NPO法人黒潮実感センター センター長)
	菊地 秀明	(愛媛たいき農業協同組合 代表理事組合長)
	黒笹 慈幾	(南国生活技術研究所 代表)
	柴田 智恵	(有限会社大豊陸送 代表取締役社長)
	床桜 英二	(徳島文理大学 総合政策学部 教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	中矢 憲吉	(愛媛新聞社 編集局次長)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事)
	西本 佳代	(香川大学 大学教育基盤センター 准教授)

(主な発言)

<「“神の衣”をつくる」(徳島局)

(総合 12月21日(土)放送) について>

○ 大嘗祭で神に献上する織物「亀服(あらたえ)」が、徳島県の木屋平で作られているということに興味を持った。「あらたえ」が、古くより徳島の阿波忌部氏によって作られてきたことや、麻の種を県が管理していることなど、知らないことが多く紹介されており、興味深かった。「あらたえ」の語源や、木屋平の地名の由来についても知りたかった。プロジェクトを立ち上げて2,900万円の資金を集めた旧木屋平村の元村長の西正二さんからは、木屋平の名前を残したいという強い思いが感じられた。他地域からの移住者で、プロジェクトメンバーで最年少の荒井和志さんを取り上げたこ

とで、地域が抱える過疎化の問題を際立たせていたと思う。最後のナレーションは、木屋平が抱える将来への希望と不安を短くもよく表現していて、制作者の思いが強く出ていて好感が持てた。政教分離原則のため自治体からの補助金はないとあったが、もう少し背景の説明がほしかった。県で管理されている麻の種についてもっと知りたかった。また完成した「あらたえ」の現物の紹介がなかったのも気になった。

○ 麻が大嘗祭で調進される「あらたえ」の原料となる大切なものであることや、阿波忌部氏の子孫である三木家が「あらたえ」を納めてきた歴史は知らなかったのもとても興味深かった。500年以上途絶えていた木屋平での「あらたえ」作りが大正時代に復活したことの紹介があったが、その理由についての説明がほしかった。2重の柵や防犯カメラでの24時間の監視などの厳重な管理下に置かれた麻畑や、自治体からの補助金は一切ないことには驚いた。8か月にわたる取材で、「あらたえ」が完成するまでの課程が丁寧に描かれており、作業する様子から木屋平の方々の誇りが伝わってきた。地域が高齢化と過疎化に直面するなかで、どのように伝統を継続していくかについて考えさせられた。最後に取り上げた大嘗祭後の地元の方のことばは印象に残り、番組の結びにふさわしいものだった。地域の歴史と伝統文化を後世に伝えるという点で、番組で取り上げた意義は大きいと感じた。

○ 8か月におよぶ丁寧な取材で、「あらたえ」の製作過程が分かりやすく表現されていた。地域の人々の声から、「あらたえ」を地域の誇りと感じていることも伝わった。「あらたえ」について基礎的な情報の説明があり、「あらたえ」を知らない視聴者にも理解できる工夫がされていてよかった。政教分離の原則で自治体から補助金がないことも触れられており、25分の短い番組時間で必要な内容が整理されて伝えられていた。字幕テロップやナレーションで「地域の誇り」が繰り返され、制作の意図も伝わってきた。一方で、500年以上「あらたえ」作りが途絶えていたことや、地域に麻の栽培方法の技能が無いことから、「地域の誇り」と言うことばが必ずしも木屋平の現状を表しているとは言えないように感じた。移住者の荒井さんも地域に溶け込むために「あらたえ」作りに参加しており、「地域の誇り」にまとめられないと感じた。木屋平の厳しい現状を伝えなかったのかもしれないが、かえってテーマがぶれて意図を理解しにくいものとしていたように感じた。

○ 木屋平に「あらたえ」作りの技能が残っていないことや、自治体からの補助金がないなど、プロジェクトがいかに大変だったか理解できた。そのなかで、県外の栽培農家の指導も受けながら、地元の人々が協力しながら手探りで麻の栽培に取り組む様子がよく伝わってきた。収穫した麻をカビが生えないように熱湯でゆでて殺菌して乾燥させるなど、非常に手間のかかる作業の一端や、古来の製法にのっとりたという麻

糸の作り方や布の織り方も簡単に紹介されていて、よく理解できた。「あらたえ」作りで地域の誇りを感じてもらいたいと語る西さんを紹介していたが、その誇りを次世代に継承していくことで地域の再生につながるのではないかと感じられる、前向きで期待の持てるような内容でよかったと思う。25分という短い時間の中で、「あらたえ」の歴史や製作方法、麻の栽培の難しさ、それに向き合う地元の人々の様子などの多くの要素がバランスよく取り上げており、大変見ごたえのある番組だった。

- 県庁での麻の種の受け渡しや金庫での保管、2重の柵や防犯カメラによる24時間の監視など、麻の栽培が想像以上に厳格な管理の下で行われていることが理解できた。その様子はどれも見たことの無いものばかりでとても興味深く、視聴者の関心に応えられていたと思う。ただ25分という放送時間で、木屋平の過疎化・高齢化まで焦点を当てたのは、盛り込みすぎに感じた。西さんが集落の中心街を歩き、老人と対話する場面は、あまり必要な場面ではなかったと感じた。木屋平の人口推移や高齢化率の基礎データを示せば、十分に地域の過疎化・高齢化の実情を伝えることはできたと思う。一方で「あらたえ」製作の様子は字幕テロップでの紹介が中心だったのは不十分に感じ、もっと映像で作業工程を見せてほしかった。番組タイトルにあるとおり、“神の衣”作りの様子を見せることにもっと重点を置いてほしかった。徳島で起きていることを地元の視聴者に伝えるという点では、この番組の意義は非常に大きかったと思う。

(NHK側)

大嘗祭に調進される「あらたえ」作りという地域の伝統行事を通して、宗教色の強い皇室行事における政教分離の原則や過疎地域の衰退など、いくつかのテーマを取り上げていたため、受け止めが難しかったかもしれない。25分という限られた放送時間で、どのような情報をどのような流れで伝えれば視聴者にとって分かりやすいものとなるのか、より意識して番組制作に取り組みたい。

(NHK側)

荒井さんはインタビューから、他地域からの移住者ということもあって、木屋平のことを実に客観的に捉えていると感じた。またプロジェクトメンバーで最年少ということもあり、地域の伝統行事を次世代につなぐという意味において重要な役割を担っているということでも取り上げた。今回の番組には、過疎地域である木屋平の地域の一大行事を取り上げるドキュメンタリー番組と、伝統と由緒のある「あらたえ」を紹介する教養番組としての2つの面があった。そ

のどちらに重きを置くのかで番組の印象は大きく変わったと思うが、今回の「あらたえ」作りは木屋平の人々の熱意があって実現したものであり、そのことを記録して発信したいと思い、前者に重きを置いて番組を制作した。

- 木屋平について、徳島県外の視聴者も理解できるように、地図や標高などの基礎情報の紹介がほしかった。木屋平での「あらたえ」作りの歴史や、今回の製作にあたっての地域の方々の苦勞と熱意はよく伝わってきた。木屋平の「あらたえ」作りが500年以上途絶えていたことを紹介していたが、その間に徳島以外の地域からの「あらたえ」の調進があったのかが気になった。20年前に木屋平に移住してきた荒井さんからは、地域に溶け込みたいという思いや、周囲の人たちの期待や距離感が、映像からよく伝わってきてよかった。木屋平で行われた、「あらたえ」の大嘗祭への出発式のあとの西さんのことばからは、今回の取り組みを通じて少しでも地域に元気を取り戻したいという強い思いが感じられてよかった。大嘗祭翌日の地元の方の声は、「地域の誇り」という結びにつながるすばらしいものだったが、少し聞き取りにくかったのが残念だった。また女性や若い世代の声も聞きたかったが、無かったのは残念だった。
- 大嘗祭に納められる織物「あらたえ」は、日常生活とは縁遠いもので、目新しく興味深かった。材料の麻は一般の人には入手が困難なもので、麻の種の県庁での受け渡しや、種を金庫で保管している様子は貴重な映像で興味深く、材料の特殊性が文化の伝承をより困難なものとしているということが想像できた。麻を栽培している間も、防犯カメラと侵入センサーを設置し、24時間交代での監視体制を敷いているのは驚いた。栽培の様子も初めて見る映像ばかりで新鮮だった。今後「あらたえ」作りを伝承していく役割を担っていく方を取り上げたことや、政教分離の原則によって自治体からの補助金がなかったことを紹介したのも、考えさせられてよかったと思う。麻を紡いで計48キロメートルの糸をつくり、その糸で「あらたえ」を織る場面はすぐに終わってしまった印象で、もう少し詳しく知りたいと感じた。完成した「あらたえ」の現物が見られなかったのは残念だった。また、「あらたえ」の製作にかかったコストを具体的に知りたいと感じた。
- 徳島での「あらたえ」作りが、およそ1200年前から行われ、500年以上途絶えたのちに大正時代になって復活したということには驚いた。麻の栽培が県の厳重な管理下で行われることや、政教分離のため自治体から補助金が出ないことなどは興味深かった。木屋平村が平成の大合併により消滅し、過疎化・高齢化が進んで人口がかつての10分の1にまで減少するなかで、地域の誇りである伝統をつなぐ様子は印象に残った。荒井さんの地元との微妙な距離感や、伝統を継承する若い人材として期待され

ている様子が映像ではっきり映し出されていて、印象に残った。完成を阿波忌部氏の神に報告する神事で、阿波忌部氏の子孫である三木家が登場していたが、その場面の前後を含めて三木家の紹介がなかったのは不親切だと感じた。完成した「あらたえ」を大嘗祭に見送り、誇らしげに語る西さんに対し、大嘗祭後の一般の住民のインタビューは今ひとつ気持ちが伝わらなかった。全体として、淡々としていて、抑揚が無く印象に残りにくかった。

- 過疎化・高齢化が進み、人口が急速に減少している木屋平での「あらたえ」作りを取材して、伝統行事を通して地域の誇りを高める様子が映像化されており、よく理解できた。麻の栽培の様子を、栽培の特殊性や難しさとともに時系列で紹介していて、分かりやすくよかったと思う。ただ、なぜ木屋平で「あらたえ」作りが行われているのかの説明が足りず、その理由が視聴者に伝わらなかったのではないか。阿波忌部氏の子孫と伝わる、今回の「あらたえ」作りの一連の作業をまとめる「御殿人（みあらかんど）」である三木家の当主も、番組で紹介すべきだったと思う。地域住民が結束してその困難な作業にあたる姿を映し出すという趣旨は理解できたもの、そこを割愛したのは適切ではなかったと思う。25分という放送時間の制約があることは分かるが、天皇即位という歴史的に大切なテーマであるため、重要な情報を漏らさず取り上げてほしい。
- 1000年を超える歴史を持つ「あらたえ」作りを通して、過疎化・高齢化が進む地域の問題を上手く浮き彫りにしていた。サブタイトルで「ふるさとの誇りをつなぐために」などとあれば、主題の意図がより視聴者に伝わったのではないか。「あらたえ」作りがこれほど大変で、自治体からの支援がないことや、地域に麻の栽培の技能が残っていないことは知らなかったのが驚いた。麻の栽培が想像以上に厳重な管理下で行われており、地元の方々の熱意には頭が下がった。「あらたえ」作りのような地域の伝統が継承されないことは、過疎地域が今抱えている大きな問題だということが認識できた。人口がピーク時の10分の1となり、地域が消滅の危機に瀕しているなかで、「あらたえ」作りを「地域の誇り」を感じられる機会と捉えて取り組んだ方々はすばらしいと感じた。「あらたえ」作りという地域の伝統文化をぜひ次世代に伝承してほしいと思う。木屋平に限らず、過疎地域において伝統のある文化や風習が消滅しつつあるなか、NHKには、こうしたものを映像として記録し、伝承していくことに期待している。
- 大嘗祭で、徳島の木屋平で作られる「あらたえ」と呼ばれる麻の織物が調進されることや、麻の栽培が県の厳格な管理下で行われることなどは知らなかったのが興味深かった。麻の栽培や「あらたえ」作りの技能が地域に残らず、自治体からの資金面

の援助がない中で地元の方が苦勞して取り組む姿から、1000年以上続く地域の誇りを伝承したいという強い思いが感じられた。種まきから約100日で収穫という麻の成長の速さにも驚いた。麻糸を作って麻布を織り上げる工程の紹介は、麻の栽培風景の紹介と比べて短く、もっと見せてほしかった。移住してきた荒井さんの話題を含めて、25分の放送時間ではすべての話題を十分に伝えられていなかったと思う。完成した「あらたえ」を送り出す村を挙げての出発式の賑わいや、列を先導する西さんの誇らしげな姿がとても印象に残った。過疎地域の村だからこそ、地域の文化を伝承することが、地域の誇りを取り戻すうえで大切だということがよく理解できた。ぜひこの文化を伝承してほしいと強く思った。

(NHK側)

今回の番組では、木屋平での「あらたえ」作りの様子をしっかりと見せることに重きを置いていたため、御殿人の三木さんは宮内庁から依頼を受けた立場ではあるものの、実際の製作作業には加わらないということもあり、放送では紹介しなかった。ただ三木家は「あらたえ」に関する資料を多数保有しているので、そういった資料の内容も取り上げながら、「あらたえ」の歴史などについてももう少し詳しく伝えてもよかったかもしれない。この番組はまず12月7日(土)にBS4Kで43分番組として放送しており、そのなかではもっと多くの地元の方の声を取り上げていたが、地上波で地域放送するにあたり、取り上げる方を一部に絞り込んだ。完成した「あらたえ」の現物については映像を使用することができなかつたため、前回の大嘗祭のものを番組の冒頭で紹介した。「あらたえ」作りの一部の工程は木屋平以外でも行われていたが、番組では木屋平で行われた麻の栽培について重点的に取り上げた。

(NHK側)

徳島で行われる「あらたえ」作りという伝統行事の様子を残したいと考え、4Kの超高精細映像で撮影し、BS4Kで全国に向けて発信した。地域の貴重な伝統や文化を映像で残し、情報発信するとともに次世代の記録として残すことはNHKの重要な役割だと考えているので、引き続き取り組んでいきたい。

(NHK側)

番組の制作にあたっては、見ている人の立場に立つということを変更して意識したいと感じた。番組を初めて見る視聴者が、一度見た

だけでも理解してもらえそうな内容や構成を改めて意識し、今後の番組制作に取り組みたい。

<放送番組一般について>

- 12月31日(火)の「第70回NHK紅白歌合戦」(後 7:15~8:55、9:00~11:45)を見た。趣向を凝らした企画や、多彩で豪華な出演者など制作側の意気込みが十分に感じられたが、1年の締め括りとしての特別感が少なかったように感じた。徳島県出身の米津玄師さんが作曲した「パプリカ」で始まり、おしり探偵やチョコちゃんなどのキャラクターを登場させるなど、序盤に子供たちが喜ぶような演出があっただけよかった。テレビ離れが進んでいる若年世代を意識したためか、全体的にアイドルグループの歌唱が多く、時間が長く感じた。ラグビー日本代表の選手たちを頻出させていて、人気に頼りすぎていたように思ったし、A Iの美空ひばりさんも心に響かなかった。すべてを見るととても長く感じた。番組を2部構成にして内容を分け、前半はファミリー層に向けた内容や1年を振り返る企画、後半は歌手の歌唱を聞かせる本格的な歌番組にするなどの工夫がほしいと感じた。
- 「第70回NHK紅白歌合戦」を見た。歌合戦とは言えないような企画が多く続き、途中見続けるのがつらいものもあった。歌唱のシーンで、NHKホール外からの中継が多かったことや、一つ一つの曲の歌唱時間が短いことが気になった。ただ全体としては、多くの世代で楽しく視聴することができるものになっていたのではないか。番組の企画で嵐の大野智さんが松山放送局のディレクターに扮して登場したのは四国に住む者としては興味を引いた。こうした演出で地方の話題を取り入れるのは、地方在住者の関心を引くよい取り組みだと思い、好感が持てた。
- 「第70回NHK紅白歌合戦」を見た。ラグビー日本代表の登場は、2019年のラグビーワールドカップの盛り上がりや、東京オリンピック・パラリンピックにつないでいこうという意気込みが感じられてよかった。Superfly や MISIA さんなどの歌唱はすばらしかったが、アイドルグループの多さが気になった。「L I F E !」とのコラボレーション企画はおもしろかった。ビートたけしさんがさまざまな場面で登場したのも楽しかった。A I 美空ひばりさんの新曲の歌詞はとてもよかったが、歌っている姿は心に残るものでなく残念だった。
- 「第70回NHK紅白歌合戦」を見た。高知県出身の三山ひろしさんの歌唱は、けん玉のギネス記録に挑戦する企画ではなく、きちんと歌を聞かせるものにしてほしい

と思った。歌と関係ない企画が多すぎる印象を受けた。紅白歌合戦の基本である歌を聞かせることに主眼をおいてほしい。

- 1月1日(水)の「100分 de ナショナリズム」(Eテレ 後 10:00~11:40)を見た。元日にナショナリズムを考えるという企画には心意気を感じ、期待をもって視聴した。内容は興味深く、かつバランスも取れていてとてもよかった。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを前に名著からナショナリズムについて考えるという導入で始まり、東京オリンピック・パラリンピックに熱くなれない視聴者層をうまくフォローしていると感じた。公共メディアの役割は何かという問いに、真摯に答えようとしている番組だと感じた。SNS上でもこの番組が話題になっていて、反響の大きさが分かった。別のテーマでの次回作にも期待している。
- 1月6日(月)の逆転人生「全国から注目 離島の高校 廃校危機から変革が起きた」を見た。東京の大手企業を辞めて島根県の離島に移住し、島の高校を改革した男性を紹介していた。当初は効率を重視しすぎるあまり島民になかなか受け入れられなかったが、粘り強い努力で徐々に周りの支援を受けるようになった過程がうまく描かれていた。県外からの生徒も受け入れ、高校の立て直しを成功させた男性の仕事ぶりに感心した。全体を通してとても興味深く見ることができた。
- 1月10日(金)の「ふるさととずっと～愛媛・豪雨1年半～」(総合 後 7:30~7:55 愛媛県域)を見た。西日本豪雨から1年半という節目での放送ということで、今後も継続して取り上げてほしい。また西日本豪雨の関連番組を、愛媛県出身の首藤奈知子アナウンサーが継続して担当していることはよいことで、地元の視聴者は好意的に受け止めたと思う。西予市野村町が町を挙げて、伝統の乙亥大相撲に取り組んでいることに勇気をもらえた。
- 1月10日(金)のドキュメント72時間「激走400キロ! 沖縄1周サバイバルラン」を見た。11月に行われた、沖縄本島1周400キロメートルを走る大会に密着する番組だったが、「なぜそこまでして走るのか」という問いに対する出場者それぞれの答えが紹介されており、放送時間があっという間に感じるほど見入ってしまった。多様なバックグラウンドを持つ出場者の思いがよく伝わり、非常によい番組だった。
- 1月11日(土)の「しろくまピース20歳～家族と歩んだ“いのち”の軌跡～」(総合 後 7:30~8:15)を見た。手のひらに乗るほど小さかったピースが、20歳まで成長してきた記録を過去の映像を交えて余すところなく伝えていた。過去のピースの映像はとてもかわいく、団地でしろくまを飼っていたというエピソードはほほえましかっ

た。腕を噛まれた飼育員の高市敦広さんがピースを叱る場面は、アライグマを飼育した経験を交えて真剣に叱った様子が伝わり、まるで本当の子育てのようだと感じるエピソードだった。てんかんの持病があるピースに目配りし、プールから助け出す映像は貴重なものと思った。番組を通じて、高市さんとピースの強い信頼関係が常に感じられた。ピースの飼育での経験や知恵が、全国に広がっていることもすばらしいと感じた。

- 1月15日(水)と16日(木)の2日にわたって放送された、クローズアップ現代+「シリーズ 検証・かんぽ問題」を見た。長い時間をかけてNHKが取り上げてきた問題だけに、内容がしっかりしていると感じた。出演していた弁護士や大学教授の発言も、問題をきちんと捉えていてよかった。行政の今までの対応やあり方が適切だったのかどうか、政治責任の有無についてもさらに追及してほしい。1月3日(金)のBS1スペシャル「欲望の資本主義2020～日本・不確実性への挑戦」のなかで、経済学者の宇沢弘文さんが提唱していた「社会的共通資本」が取り上げられていたが、その観点から、郵政民営化から今回のかんぽ問題に至った経緯を探るような番組にも期待したい。NHKのかんぽ生命の保険をめぐる番組制作については、放送の自主・自律や編集権に関わる問題として大きく報道されているが、放送の中で、NHKの考えや対応を表明してもよかったのではないか。
- 1月17日(金)の前園真聖 しこく絶景旅「冬の愛媛・高知編」(総合 後7:57~8:40 四国ブロック)を見た。高知県黒潮町にあるあまり知られていない温泉が取り上げられていたのは興味深く、放送に取り上げられたことをきっかけに関心を持って訪ねる人もいないのではないか。イルカの親子が湾内に住みついていると紹介された高知県大月町の柏島も、番組をきっかけに観光客が増え、地域の振興につながることを期待している。全体を通して非常に楽しい番組だった。
- 1月17日(金)のジオ中四国 奇跡の大地「美食誕生の秘密は緑の石」(総合 後7:30~7:55 愛媛・徳島・香川県域)を見た。讃岐山脈の隆起が吉野川の流れを変えたこと、三波川変成帯のきめ細かい土壌が瀬戸内海のハマの生育に関係があることを始めて知り、知的好奇心を刺激された。香川県の雨の少なさが四国山地と讃岐山脈が並んでいることから起こり、そのために盛んになった小麦の栽培が、讃岐うどんの誕生へ繋がって行ったという流れがよく理解できた。各地の美味しいものは、その土地の地形や地質の恩恵を受けて生まれるということが伝わってきた。専門用語を交えながらも非常に分かりやすく、親しみのある作り方でおもしろかった。今後のシリーズにも期待している。

- 1月19日(日)の大河ドラマ「麒麟(きりん)がくる」を見た。これまで悪役に描かれることが多かった明智光秀は、最近は専門家の間でもその評価が見直されているということで、今回の大河ドラマでどのように描かれるのか非常に楽しみだ。本能寺の変など、真相が謎に包まれている事項についてどのように取り上げるのか、期待している。
- 「麒麟(きりん)がくる」を見た。初めて全編を4Kの超高精細映像で撮影した大河ドラマということで、とても美しい映像も見ごたえがあった。ただ、鮮やかな色合いの着物に違和感があった。
- 1月20日(月)の「NHKニュース おはよう日本」のなかで取り上げていた「災害時 外国人には“やさしい日本語”で」を見た。日本で生活・滞在する外国人が増えるなか、NHKでは、災害時だけでなくふだんの放送でも、やさしい日本語で伝えることを意識してほしい。
- BS1で不定期に放送されている「沁(し)みる夜汽車」は、10分間とは思えない余韻がある。とても多くの手間がかかっていることが伝わり、すばらしい番組だと思う。長時間のドラマは、前回のストーリーの記憶が曖昧になったり、途中で集中力が続かなくなったりするが、10分という放送時間はちょうどいい。森田美由紀アナウンサーのナレーションも心地よく、とても癒やされる。番組で紹介されるエピソードはどのように収集し、どこまで実話に基づいているのかが気になった。取り上げるエピソードは必ずしも夜ではないのに、タイトルが「夜汽車」なのが気になった。

(NHK側)

取り上げているエピソードは、ディレクターが鉄道関係の専門家や親しい人に話を聞いたり、SNSでエピソードを収集したりしており、すべて実話に基づいて制作している。登場人物を取材し、実際の映像で構成することもあれば、再現ドラマを挿入する場合もある。タイトルは視聴者にも浸透している印象を持っており、12月24日(火)に放送したBS1スペシャル「沁(し)みる夜汽車 2019冬」(BS1後8:00~8:50)では、華やかなクリスマスイブの夜にあえてしんみりとする番組を放送したことで、SNS上で多くの反響が見られた。

- 年末年始期間の特集番組では、新年の展望を語るような番組が少なく、情報バラエティー番組が多いと感じた。政治家が登場するような番組はほとんどなく、お笑い芸

人やタレントばかりが目立っていた。NHKらしい硬派な番組があまり見られなく残念だった。

NHK松山拠点放送局
番組審議会事務局